

## メッセージアウトライン 出エジプト記15:22~16:36 「神の備え」

イスラエル人たちを追って、水の分かれた海底に入ったファラオの戦車と騎兵の全軍勢は戻って来た紅海の水により全滅してしまった。イスラエル人は決定的にエジプトの恐怖から解放された。彼らは、主がエジプトに行われた、この大いなる御力を見た。それで民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。(14:31) この時、モーセとすべてのイスラエル人は主にほめ歌を歌い、またアロンの姉ミリアムと他の女性たちもタンバリンを持って主を賛美した。(15:1~21) 彼女は歌う賜物を持っていたのであろう。今作ったばかりの賛歌をタンバリンとともに節をつけて歌った。ここではミリアムは女預言者と紹介されている。ミリアム…「愛される者」の意。新約時代のマリアに相当する。

[15:22]「モーセはイスラエルを葦の海から旅立たせた。彼らはシュルの荒野へ出て行き、三日間、荒野を歩いた。しかし、彼らには水が見つからなかった」

エジプトから解放されたイスラエル人たちは早速現実的な問題に直面しなければならなかった。

「シュルの荒野」…シナイ半島の北西部。彼らは三日間その地を歩いたが水が見つからなかった。持って来た水もなくなってしまったことだろう。

[23] 彼らは水の問題と戦いながら、さらにそこから南下してマラに来了。そこには池か湖か分からないが水があった。しかし、その水は苦くて飲めなかった。塩分か硫黄分か何か不純物を含んでいたのであろう。その地はもともと名もない所であったが、その水が苦くて飲めなかったので「マラ」(苦しみ)という名で呼ばれることとなった。

[24]「民はモーセに向かって『われわれは何を飲んだらよいのか』と不平を言った」

この不平はモーセを指導者として立てられた神への不平、不信ともなる。主なる神の奇跡によって分けられた紅海を渡って、神のすばらしい栄光を見て、大いに賛美し、天にも昇るような思いであったであろうイスラエルの民は、三日で不信の民に戻った。聖書はこのように人間の赤裸々な姿を割り引くことなくリアルに描き出している。

[25-26]「モーセが主に向かって叫ぶと、主は彼に一本の木を示された。彼がそれを水の中に投げ込むと、水は甘くなった。主はそこで彼に掟と定めを授け、そこで彼を試み……」

モーセは民の不信の声を聞いて、主に向かって助けを求めて叫び、主が示された一本の木を水の中に投げ込むとその水は甘くなった。このようなこと常識では考えられない。それゆえ、これも主の力による奇跡的な出来事なのである。主はちゃ

んと彼らと共におられ、彼らの必要に答えてくださるのである。ここで主は彼に掟と定めを授けた。これはどのような内容であるか書かれていないが、大切なことは26節にあるように「あなたの神、主のみ声にあなたが確かに聞き従い、主の目にかなうことを行い、また、その命令に耳を傾け、その掟をことごとく守る」ことである。このように授けられた掟と定めを守るか否かを主はモーセに対して試みられ、それをことごとく守るならエジプトに対して下されたような病気は何一つ下さないとと言われる。これは直接的にはモーセに対して言われたことばであるが、これから新しい歩みを始めるすべてのイスラエル人に対しても同様に求められていることである。主のみこころにかなった生き方をすることこそ、健康と健全な生活の道なのである。

[27]「こうして彼らはエリムに着いた。そこには、十二の水の泉と七十本のなつめ椰子の木があった。そこで、彼らはその水のほとりで宿営した」

「エリム」…テレピンの木、または檜の木を意味する。マラからさらに十数キロ南へ下ったところと思われる。「なつめ椰子」…椰子の木に似ており、果実はなつめのような形をしており、百五十年ほど結実を続け、古代社会においては重要な果実であった。「十二」はイスラエルの十二部族と対応し、「七十」は完全数を表すことから、これはイスラエルの民を養うのに十分なだけの水となつめ椰子の木があったということを示しているのかもしれない。ここで彼らは宿営した。十分疲れをいやしたことであろう。

[16:1]「イスラエルの全会衆はエリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイの間にあるシンの荒野に入った」

「第二の月の十五日」…第一の月の十五日にエジプトを脱出したので(12章)、ちょうど一か月経過している。「シンの荒野」…これはエリムからさらに南へ下ったところである。約束のカナンの地からはだんだん遠ざかっている。ここは「荒野」と言われているので、何も無い、砂や岩の多い荒れた地であっただろう。

[2] ここでまたもイスラエル人の全会衆はモーセとアロンに向かって不平を言った。このような旅では常に食料の問題がついて回る。昨日満腹でも、今日食べられないと、人間というものは不安になる。そして、自分たちをそのような状態に導いた指導者に対して不平、不満を言うのである。

[3] 彼らはエジプトでの食事を懐かしみ、そこで腹一杯食べていたときに、主の手にかかって死んでいたらよかったのだと恐ろしい不平を言う。彼らはエジプトで奴隷としてどれだけ虐げられ、苦しめられてきたかということのをさっぱり思い出そうとはしない。これは片手落ちであるが、これも人間の常である。昔の苦しかったことを忘れ、楽しいことだけ思い出す。そして「昔はよかった」と言うのである。しかも今、「あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出し、この集団全体を飢え死にさせようとしている」と、モーセとアロンを責めるのである。これがアブラハム、イサク、ヤコブの子孫、神の選びの民であるはずのイスラエルの現実の姿なのである。

しかし、そのような彼らに主は決して愛想をつかすことなく、すばらしい配慮をもって答えられる。

[4-5]「主はモーセに言われた。『見よ。わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。六日目に彼らが持ち帰って調えるものは、日ごとに集める分の二倍である』」

主は彼らのために天からパンを降らせると言われた。民はそれを外に出て毎日、その日の分を集める。どのようなパンが天から降るのか、この時点ではわかっていない。ただこれは、これから彼らが主のおしえに従って歩むかどうかを試みるためのものであると言われている。つまり、彼らが主のおしえに従って毎日集めなければ自分たちのものにならないということであり、一回に何日分も集めようとしてもそれは、後でわかるように、できないのである。それゆえ、彼らはこの天からのパンに対してどのように対処するかを常に試されることになる。

七日目は休みの日、安息日であるので、その前の六日目には二倍、すなわち二日分を集めるべきことも教えられる。安息日にはあくせく働いたりせず、休み、神を礼拝する日であることを教えられる。この安息日は創世記2:1～3に記されている、神が六日間で天地創造のわざを終え、七日目には休まれたということが起源である。

[6-8]「それでモーセとアロンは、すべてのイスラエルの子らに言った。『あなたがたは、夕方には、エジプトの地からあなたがたを導き出したのが主であったことを知り、朝には主の栄光を見る。主に対するあなたがたの不平を主が聞かれたからだ。私たちが何だというので、私たちに不平を言うのか。』モーセはまた言った。『夕方にはあなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださる。それはあなたがたが主に対してこぼした不平を、主が聞かれたからだ。いったい私たちが何だというのか。あなたがたの不平は、この私たちに対してではなく、主に対してなのだ。』」

イスラエルの民は食べ物の中でモーセとアロンに不平を言ったが、それは彼らを選び、出エジプトの指導者として立てた主に対する不平であり、不信仰であった。しかし、それにもかかわらず、主は彼らに朝には天からのパンと夕方には肉を与えと言われた。それによって彼らは主の栄光を見、主が彼らをエジプトから導き出したお方であることをはっきりと知るためであった。

彼らが不平不満を言わず、心から主を信頼していたならば、主は喜びをもって天からのパンを降らせ、また肉を与えることをされたであろう。しかし、これが今のイスラエルの現実の姿なのである。

[9-10]「主の前に近づきなさい、主があなたがたの不平を聞かれたから」…自分たちの天幕を出て、主が臨在され、彼らを先頭に立って導いている雲の柱のそばに

来なさいということであろう。

「…彼らが荒野の方を振り向くと、見よ、主の栄光が雲の中に現れた」…彼らを導いていた雲がいつそうまばゆく光輝いたのであろう。このことによって彼らは自分たちの不信仰に気づかされ、主なる神への畏敬の念を持ったと思われる。

[11-12] これは内容的には6～8節で主が言われたことの繰り返しであり、確認である。しかし、具体的にはいったいどのようにしてであろうか。この時のイスラエル人の人口は約二百万人はいたであろう。

[13-15]「すると、その夕方、うずらが飛んで来て、宿営をおおった」(13) 驚くべきことが起こった。夕方になると、うずらが飛んで来たのである。うずらはキジ科の鳥で体長約20センチメートル。エジプト人の大好物であった。この時飛んできたうずらは一羽や二羽ではなく「宿営をおおった」とあるので数えきれないほどの大量のうずらが飛んで来たのである。うずらは春にアフリカからヨーロッパに移動し、ちょうどシナイ半島からパレスチナあたりがその通り道である。エジプト脱出から一か月後という太陽暦では四月半ばから五月半ばにかけてであり、うずらの移動の時期に当たる。主はちょうどそのようなして集団で移動するうずらを、イスラエルの民が宿営している地に導かれたのであろう。主はしばしばこのような方法で奇跡を行われる。もちろんこのうずらが飛んで来たのは一時的であり、イスラエルの民が旅を続けているすべての期間ではない。しかし、後年、彼らが肉を食べたいとまた不平を言った時に主は今回と同様に彼らに肉を与えられる。→民数記11:31-32

主なる神にとって不可能はない。

そして朝になると、宿営の周り一面に露が降りた。その露が消えると霜のような薄く細かいものがあつた。イスラエル人は、「これは何だろう」と言いあつた。モーセは彼らに「これは主があなたがたに食物として下さったパンだ」と説明した。31節を見ると彼らはそれを「マナ」と名づけたと書かれている。これは彼らが言った「何(マーン)」ということばから、つけられたものと思われる。

[16-18] モーセは主の命じられたマナの集め方、食べ方を説明した。一人当たり一オメルずつ集める。1オメルは2.3リットルに相当する。しかし、たくさん食べる者も小食の者もいたであろう。18節では「自分が食べる分に応じて集めた」とあるので、各自にとってはピッタリの量であつたので、余ることもなく、足りないこともなかつたということであろう。

[19-20] モーセはそれを翌朝まで残すことを禁じたが、ある者がその一部を残しておいたところ、虫がわき、臭くなり、食べられなくなつた。それでモーセは彼らに向かって怒つた。

[21]「彼らは朝ごとに、各自が食べる分量を集め、日が高くなると、それは溶けた」

天からのパンは朝ごとに集めなければならない。信仰者にとって一日の初めに神のみことばによって養われることは大切なことである。

[22-24]六日目に、彼らは二倍のパンを、一人当たり二オメルずつを集めた。会衆の上に立つ者たちがみなモーセのところに来て、告げると、モーセは彼らに言った。「主の語られたことはこうだ。

『明日は全き休みの日、主の聖なる安息である。焼きたいものは焼き、煮たいものは煮よ。残ったものはすべてとっておき、朝まで保存せよ。』」モーセの命じたとおりに、彼らはそれを朝まで取っておいた。しかし、それは臭くもならず、そこにうじ虫もわかかなかった。

平日に集めたものはその日のうちに食べる。しかし、安息日は主の日であり聖なる安息の日であるので前日に二倍の分を取って保存しておいても腐ることはなく、食べることができる。これは主のすばらしい配慮であった。

[25-30] 安息日にマナを集めに出かけた者がいたが何も見つからなかった。それゆえ、これは超自然的な食べ物であることがわかる。主はこのようなことをした民の不忠実を怒り、改めてモーセを通して安息日の重要性を教える。「心せよ。主があなたがたに安息を与えたのだ。そのため、六日目には二日分のパンをあなたがたに与えている。七日目には、それぞれ自分のところにとどまり、だれも自分のところから出てはならない」それで民は七日目に休んだ。

これが主から与えられた「命令とおしえ」(28)であった。これ以後、イスラエルはこの主の命令を守り、それが彼らの生活様式となった。そしてこのスタイルは今日、全世界に及んでいる。六日間働いて一日休む。このリズムが人間にとって一番良いのである。

[31]「イスラエルの家は、それをマナと名づけた。それはコエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れた薄焼きパンのようであった」

「コエンドロ」…水辺に生じるセリ科の一年生草本。茎の高さ約60cm。茎、葉ともに特有の香気があり、種は直径約3ミリ、白色球状で芳香がある。→コリアンダー

[32-33]モーセは言った。「主が命じられたことはこうだ。『それを一オメル分、あなたがたの子孫のために保存しなさい。わたしがあなたがたをエジプトの地から導き出したときに、荒野であなたがたに食べさせたパンを、彼らが見ることができるようにするためである。』」モーセはアロンに言った。「壺を一つ持って来て、マナを一オメル分その中に入れ、それを主の前において、あなたがたの子孫のために保存しなさい。」

これは何もない荒野でこのパン(マナ)によって養われ生かされたことの記念とするためであった。「彼ら(子孫)が見ることができるようにするため」とあるので、この壺に入れられたマナは腐ったり、なくなったりしなかったのであろう。これも不思議なことである。

[34]「主がモーセに命じられたとおりに、アロンはそれを保存するために、さとの板の前に置いた」

「さとしの板」…この後にモーセがシナイ山で主から与えられる十戒の記された石板。それは後に作られる「あかしの箱」の中に入れられた。→25:16, 31:7, I列王記8:9、ヘブル9:4

あかしの箱はこの時点ではまだ作られていなかったもので、これは完成した時点で置いたということであろう。

[35-36]「イスラエルの子らは、人が住んでいる土地に来るまで、四十年の間マナを食べた。彼らはカナンの地の境に来るまでマナを食べた。一オメルは一エパの十分の一である」

「一エパ」…23リットル「四十年」…彼らはそんな長期になるとは思わなかっただろう。しかし、それは彼らが不信仰に陥り、主に逆らい、主に従わなかった結果の主のさばきの期間(民数記14章)であったので、もし彼らが不信仰にならず、主に従い続けていたならば、もっと短期間で約束の地に着いていたであろう。しかし、その四十年間も主は彼らを見捨てず、天からのパン、マナをもって彼らを養い続けてくださったのである。

イスラエルの民はエジプトから主によって奇跡的に救い出されたことを忘れ、目の前の現状に不平不満を言い、エジプトでの奴隷時代を懐かしむ。ここには人間の恐ろしい不信仰の姿を見る。しかし、それでも主は彼らを憐れみ深く、忍耐をもって導き続けてくださる。主は何もない荒野で彼らを導き、守り必要なものを備えてくださる。苦い水を飲めるようにしてくださり、肉を与え、天からのパンで彼らを養い、安息日を守ることを教えてくださった。安息日はこの世の俗的なものから離れ、神を礼拝し、神と交わり、信仰者との交わりのうちに憩い、強められ、励まされ、新たな力を得て世に出て行くために大切な日である。 私たちも目の前の現実だけを見て、不平不満を漏らし、不信仰になるのではなく主が最善をなしてくださることを堅く信じ、信仰をもってどんな時でも従い続けていく者になりたい。→ヘブル10:36